20231022 猪高の森自然観察会　2023 年 10 月報告書

猪高の森自然観察だより　10 月号

開催日時：2023 年 10 月 22 日（日）
天候：晴　　気温：最低 9.6℃、最高 20.7℃（名古屋に於いて）
テーマ:木の実・草の実・赤トンボ
参加者構成:一般8名(内 NACS-J 会員3名)
コース予定:森の集会所 → 井堀の大クス→ 井堀の下池→ 井堀の谷地田（棚田)→
ハンノキ湿地 → こもれび池 → シダレザクラの里→ 森の集会所

（左上の画像は　畑エリア付近にてアサギマダラ）

10 月に入り、9 月の気温から本来の 10 月の気温に戻りつつあります。急な変化というのはこのことでしょうか？夏の高温乾燥のために、葉を落としてしまった桜が、花を咲かせている事例をあちらこちらから聞いています。

10 月半ばの今、モズの高鳴きが聞こえています。旅をするチョウのアサギマダラも確認されています。季節は、徐々にめぐってきます。(画像は猪高緑地以外のものも含みます)

〇キンモクセイが咲き始めました。謎を抱えた樹でもあります。

観察会が実施される頃には、良い香りのピークは過ぎているでしょう。今年の開花は若干遅れているようにきいています。

ところで、植物にはすべて万国共通の学名といわれる名前が付いています。キンモクセイにも

Osmanthus fragrans Lour. var. aurantiacus Makino

(オスマンツス　フラグランス　バア　オウランティアクス)とつけられています。(名前の部分は読まないでも可)

この学名を付けたのは、他でもない、今年大変話題になり朝ドラのモデルとなった「牧野富太郎博士」です。生涯にわたり約 1,500 種に学名をつけた彼の功績がこんな身近なところにも感じられます。

この学名の意味は、「橙黄色の芳しい香りの花」でまさに、キンモクセイの姿そのものを表しています。三大香木のひとつに数えられ、「春のジンチョウゲ」「夏のクチナシ」「秋のキンモクセイ」と言われています。(「冬のロウバイ」が加わると四大香木になります。)

永らく、室町時代から江戸時代にかけて中国から雄株が輸入されて、全国に広まったとされていましたが、なぜ雌株が輸入されなかったのか？なぜ雄株しかないのか？など疑問点が残り、身近な花ながら謎のある種類で、今後の遺伝子などの解析が待たれているとのことです。

二度咲や三度咲きをするときがあるそうですが、どうやらその時の気温の変動に関係しているらしいとのことで、詳しいことは、これもまた未解明だそうです。

〇狂い咲きの花があちこちに・・。

左は「スモモ」と思われる樹に 10 月に咲いた花です。

本来、春に咲く花です。猪高緑地でも、桜が咲いているのが確認されています。

よく、台風などが原因で葉がなくなった樹に春に咲くはずの花が咲いた話を聞くことがあります。

葉には、夏から秋にかけて花芽の成長を抑制するホルモンが、作られるようになります。花芽の元が出来ている時に、なにかの原因で葉がなくなり、成長するのに十分な温度があると、花芽の成長が始まり、開花に至る、というプロセスとのことです。

今年の場合、夏の高温乾燥が落葉の原因となり、「狂い咲き」に至ったと思われます。

左は井堀下池の桜の樹。ここでも花が見られました。

〇ひっつき虫は発明のもと？！

左は「ひっつき虫」の代表のひとつ、アレチヌスビトハギの花と実（種）です。10 月も下旬となると花が終わり、原っぱでくっつく相手を待ち構えています。

ヌスビトハギは、実の周りに生えている毛の先がカギのように曲がっていることで、衣類にくっつくことができます。

これと同じ方法でくっつく種を見て、我々の生活にとても役に立つ発明が生まれました。

スイス人のジョルジュ・デ・メストラル氏は野生ゴボウの種のこの仕組みを見て、マジックテープ（面ファスナー）を考え付きました。

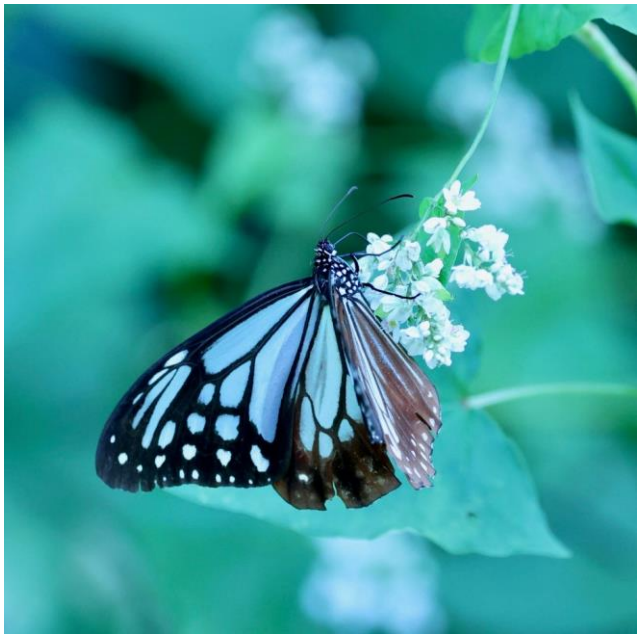
日本での販売は 1960 年からとのことです。

自然の動植物からヒントを頂くことはたまたまあるようで、新幹線の先頭車両のかたちは水鳥の頭の形から、雨水をはじく傘はハスの葉が水をはじく構造からアイデアをいただいたと聞いています。まだまだ、未発見のアイデアは沢山あるのでしょう。

ちなみに、アレチヌスビトハギは「荒地盗人萩」、足袋をはいた泥棒の足跡に種のかたち

が似ているからとか。（名前の由来については他説あります）

〇アサギマダラを初めて間近で見ることができました。



　初めて捕獲することができ、参加者の方々と詳しく観察することができました。

鱗粉のないステンドグラスのような透き通った部分のある翅、胴体部分の黒地に白い斑点の美しさ、持っていた私は、ピアノ線のような強靭な翅の支脈も感じ取れました。

　アサギマダラは、春から夏にかけて世代を繰り返しながら日本列島を北上し、秋になると南下を始める旅をするよく知られたチョウです。この時期に名古屋の緑地のあちこちで見られるのは通過途中であるからで、ヒラヒラと舞うように飛ぶ姿は秋の風物詩の一つです。2,000㎞を移動した個体もいるとの事です。

〇ミゾソバの花園に出会いました。

　花の時期とは、わかっていても綺麗に咲いている場面にちょうど出会うのは、ラッキーです。

　葉の形から別名は「ウシノヒタイ」と呼ばれます。

〇ヌルデの実はしょっぱかった！

こもれび池の広場で、実の生っているヌルデの木を見つけました。

ヌルデは雌雄異株の木ですが、この場所に雌株のあることは気が付きませんでした。

ヌルデの実は、戦国時代には籠城に備えて城内に積極的に植えられたり、戦時中は塩の代わりに使われたり、したことがあるとのことで、早速なめてみることに・・。

実の周りに塩辛い味の「リンゴ酸カルシウム」が付着し、それを塩の代わりに使ったとのことです。

塩とはちょっと違う塩辛さでしたが、料理には使えそうな味でした。昔の人は自然界にある色々なものを利用してきた知恵に改めて感心しました。

尚、ヌルデは、ウルシやハゼノキと同じ仲間の木なので、この仲間にかぶれる人は、この試みは止めておいた方がよいでしょう。ウルシやハゼノキほどではありませんが、少数ながらかぶれる人があるとのことです。

〇トンボの同定を参加者の皆さんと行いました。

この季節はアカトンボの仲間がよく飛び回っています。

今回は「これは、何トンボです。」という説明は止めて、図鑑を見ながら皆で同定をしました。

同定時に見るところは、

・翅の斑紋の位置と大きさ
・胸部の側面の黒い模様の様子
・顔の作りと色合い、模様　などを参考にしました。

左は**アキアカネ**

右は**ノシメトンボ**です。胸側面の黒い模様が明らかに異なっています

〇根の出たドングリを探してみよう。

これは、アベマキのドングリです。早くに木から落ちたので、条件が整っていれば、この時期には，もう根が出てきています。

湿ったところが発根には適しているのでそんなところを探してみましょう。きっと見つかります。

秋から冬の間に根を伸ばし、水分をしっかり蓄えて、春になると、根と同じ場所から「芽」を伸ばし始めます。

〇こんな擬態もあります。

左の写真に、一匹の虫が写っています。

どれだか、はっきりと答えられますか？

私は「間違いない」と思いつつも、最後は触って確認したほどでした。

シャクガと呼ばれる蛾の仲間の幼虫と思われます。

気が付かない「擬態」がきっとまだまだ隠れています。

左は「エビガラスズメ」の成虫です。

コンクリートの上に止まり、じっとしていると分かりにくいですね。

ご存知のアゲハの仲間の幼虫です。イヌザンショウの幼木にいました。

眼のようにみえる黒い模様は眼状紋（がんじょうもん）と呼ばれ、捕食者に狙われたときに「鎌首をもたげるような行動とともにヘビに擬態している」と言われています。

〇秋には他にも鮮やかな実や花があります

カマツカの実はリンゴのような味。硬い材を鎌の柄にしたからこの名があります。牛の鼻輪にもしたので別名「ウシコロシ」。

カラスウリの実も赤く熟していました。夏の夜に白いレースのような幻想的な花を咲かせます。

ヤノネグサの花。前述のミゾソバの花園に交じって咲いていました。名前の由来は「矢じり」のような葉の形をしているから。

早々と紅葉が始まっていたヤマハゼです。ウルシの仲間ですので、かぶれる人は要注意。この実は鳥たちの冬の大事な食料です。

〇小鳥たちの「混群」にも出会いました。子育ての終わった、シジュウカラ、エナガ、メジロ、コゲラの４種類がひとつの群れを作っていました。外敵を早く見つける為、少ない冬の食料を皆で探す為などいくつか理由がいわれています。冬の準備が自然界でも始まっています。

〇この日は谷地田（棚田）で収穫したお米の脱穀の日でした。

高温と乾燥の影響で作柄は良くないようでしたが

天気も良く、100 人余りの参加者の方々に楽しんでいただけました。この田んぼは農薬や化学肥料を使っていないので、生き物が沢山います。
田んぼグループでは、「一緒にお米を作る仲間を募集中です」あなたも一緒に活動しませんか？

次回観察会は

11 月 26 日（日）9：30～　森の集会所集合です。

名東自然倶楽部の HP では毎月の猪高の森の自然観察会の紹介をしています。
http://sizen.ciao.jp/　から是非ご覧になってください。
（右上の自然観察グループをクリックしてください。）